
部門紹介

■ 循環器センター・循環器内科 ■

2011年4月1日より、循環器内科と心臓血管外科は、院内連携・地域医療連携をより強化するために、循環器センターとして生まれ変わり、一致協力した診療体制を構築しています。その中で循環器センター・循環器内科の医師スタッフは、加藤法喜（循環器センター長・理事）、甲谷哲郎（循環器内科部長）、牧野隆雄（救命救急センター医長）、相馬孝光（循環器内科副医長）、岩切直樹（循環器内科副医長）、小松義和（救命救急センター副医長）、檀浦 裕（救命救急センター医師）、浅川響子（後期研修医）、相川忠夫（後期研修医）、高橋雅之（後期研修医）の10名です。これらのメンバーで、4階東病棟（40床）と救命救急センター・CCU 8床（CCU 4床、postCCU 4床）を担当しています。そのため、居室も分かれており、加藤・甲谷・浅川は3階総合医局に、牧野・相馬・岩切・小松・檀浦は救命救急センター・CCU 医局に、そして高橋・相川は救命救急センター・ICU 医局に机を置いています。また多くの初期研修医がローテーションしており、4～6月は加藤喜哉（1年目）、曾根孝之（1年目）、鳥羽真弘（2年目）が研修し、6月～8月は山梨克真（2年目）、8月から表和徳（2年目）がローテーションしています。

循環器内科医師の主な週間スケジュールを紹介いたします。

まず、外来は月曜日～金曜日で1日3（～4）名の医師が担当しています。午前中の診療を基本としていますが、外来患者数が多いため、午後にも予約を入れており、外来担当医師はほぼ1日拘束されることとなります。

当科の入院診療での主要検査は心臓カテーテル検査、いわゆる「心カテ」です。心カテ検査日は、月曜日、水曜日、金曜日の午後です。心カテ室は、4F手術場の心カテ室と1F救命救急センター・心カテ室の2つを使い、医師は2チームに分かれて検査を行います。通常、1日で5～10件の心カテ検査とPCI（カテーテル治療）を行い、夕方ごろに終了。その後、4F病棟カンファレンス室（心エコー室兼用）に集合し、その日の全心カテ症例の読影・症例カンファレンスを全員で行います。最近、カテ件数が増えており、週3日では消化し切れないので、火曜日、木曜日の午前にも心カテを行うことも増えています。

病棟診療では、火曜日午前にはセンター長回診、木曜日午前には部長回診が行われます。そして、木曜日午後には、入院全症例の症例検討を行う「全体カンファレンス」が行われます。なお、全体カンファレンスの他に、2チームに分けた診療グループのそれぞれのカンファレンスも別途行われています。さらに心臓血管外科との合同カンファレンスが毎週1回木曜日に開催されています。内科側から外科側へ相談する症例が提示され手術適応を検討します。そのあと、外科から手術を受けた症例の手術所見の報告があります。忌憚のない自由な討論が行われて、お互いに大変参考になる会になっています。

ついで救急対応ですが、さきに述べたように、循環器内科医師は、救命救急センター・CCUも担当しています。「ハートQQ」という365日24時間繋がるDr to Drコールがあり、市内開業の先生方や各医療機関からの直接の搬入要請に迅速に対応する体制を整えています。医長以下の医師は、CCU 当番があたり、平日夜は1～2名当直し、土日祝日も1～2名で日当直を行い、救命救急センター・CCUへ搬送される循環器救急へ対応します。重症急患が入れば、自宅待機番医師も緊急招集されます。そのため、一人当たり月3～6回の日当直があたり、大変忙しい日々を過ごしています。

そのような中でも、抄読会は必ず毎週木曜日に行われており、1回に3名がそれぞれ文献1篇を紹介し、最新のエビデンスを原著から学ぶように努力しています。さらに、「スタッフミーティング」が隔週で木曜日午前8時から行われます。10名のスタッフ全員が参加し、前日に開催された病院運営会議の内容の周知、科内の連絡事項伝達、科内問題点の検討、などを行うのが趣旨です。これにより、スタッフ全員による問題点の共有、意思の統一を図っています。

このようなスタッフの頑張りで、今年度の病床稼働率は4月；84.1%、5月；96.5%、6月；101.6%、7月；88.8%と高水準を保っています。また、8月現在で、冠動脈カテーテル治療（PCI）：201件、末梢血管カテーテル治療（PTA）：51件となっています。昨年1年間の合計がPCI：223件、PTA：54件でしたので、8月時点でほぼ昨年1年間の件数に迫っているというハイペース状態です。

循環器センター・循環器内科としての使命のひとつは、24時間体制で急性心筋梗塞を中心とした循環器救急患者を今以上に多く受け入れて、急性期病院としての責務を果たすことです。急性期症例の多い活性化した循環器診療の中で、研修医はより高度な臨床能力を身につけることが出来るようになり、教育面での波及効果も大きいと考えます。心臓血管外科のスタッフとも協調して、循環器センターをより充実した組織にするように努めますので、関係各位のご協力をよろしくお願い申し上げます。

(甲谷哲郎)